

A photograph of a dense bamboo forest. Tall, slender bamboo stalks rise vertically, creating a sense of height and enclosure. The ground is covered with a path of fallen bamboo leaves and some low-lying vegetation. The lighting is bright, with sunlight filtering through the canopy, creating a dappled effect on the path and the bamboo stalks. The overall color palette is dominated by various shades of green, from the vibrant green of the leaves to the lighter green of the bamboo stalks.

女同志で築く家
族は・・・
南海部 覚悟

「寒いわ、笑ちゃん・・・もったきつく抱いて。」

長いストレートヘアの黒い光沢の向こう側に、小麦色の腕を沿わせて優しく引き寄せます。

玲子の白い額が、笑子の頬の下で上気して桜色に染まります。

羽毛布団を覆うシルクのカバーが、二人の吐息に細かく震えています。

北海道から京都に帰任した二人が、再び愛の巣を構えたのは、京福電鉄(嵐電)蚕の駅近く木嶋座天照御魂神社の森に面した、瀟洒な4階建てマンションの最上階でした。山科疎水沿いの静けさとはうって違って、太秦映画村や弥勒菩薩で有名な広隆寺に近く、観光客で賑わう活気のある街並みです。

穴見女医のマンションに丁度空き部屋があって、強く勧められたのですが、笑子の意向でこの地に腰を落ち着けました。

古都の早朝の底冷えが、二人の肌を密着させ、お互いの鼓動が心地よい和音となって、体幹の温もりを共有します。

北海道の寒さとは異質の、しっとりとした情緒が、褥のカップルを包み込みます。

「ねえ、笑ちゃん・・・子ども、欲しくない・・・？」

唐突な玲子の言葉に、笑子が半身を起します。

「養子をもらうんですか？」

「そうじゃなくって・・・。」

「―――体外受精？」

「それも違う・・・。」

「私、男に抱かれるの嫌です！」

「私もいやだわ・・・。」

「―――だったらどうやって？」

仰向けになった玲子が真面目な顔で、「あなたの子どもが欲しいの、あなたと私の遺伝子を結合させて、私のおなかで育てて産んでみたい、最新の遺伝子医療で何とかならないものかしら・・・。」

「無理ですよ玲子さん、幾らなんでも・・・。」

「でも、何とかなるのなら・・・都合二つ子宮が在りますよね、それも私の方が玲子さんのより新しい・・・何とかなら私が産みます。此のおなかで、玲子さんの子どもを産んで育てます。」

玲子の白い手が、小麦色の腹部を優しく摩ります、「有り難う笑ちゃん、何とかなら・・・多分同時に二人赤ちゃんが産まれちゃうわね。」

トップライト越しの蒼い空に、カップルの見果てぬ夢が、儚く消入るようでした。
引っ越し荷物の、段ボールが散乱するリビングに響き渡る FAXのコールが、一気に現実を引き寄せます。

「臨場要請よ、嵯峨の大沢池で部分遺体だって！直ぐに出るから準備して！」



「一体、何入れたのよ炎症起してるじゃない！」

暗い分娩室の中で、クスコで覗き込みながら、穴見女医が呆れ顔で問い詰めます、女子学生は恥ずかしさに泣き腫らした顔を、手で覆ったままです。

「偶には、何か入れたくなる気持ちは解るけど、ちゃんと状況を確認しないと・・・彼氏がトイレでぶん回したのを、そのまま銜え込んだんじゃないの？」

容赦のない女医の言葉に、堰を切ったように大泣きします。

「男は皆、デリカシーの片鱗も持ち合わせていないから・・・だからって、根菜類は駄目よ、アレルギー性の粘液を出すものも多いから。」

「まあ、何入れるにしても十分に滅菌してからよね・・・。」

処置を済ませて、若い臀部をペシッと叩くと、分娩室の引き戸が少し開いて、スタッフの一人が顔を覗かせます。

「穴見先生、京都府警の黒木って方が面会にいらしてます。」

京都大学医学部実習棟のエントランスに併設された小さなカフェで、3女子は昼下がりのコーヒーを飲んでいます。

「今朝の大沢池の部分遺体のこと？——若い女性の左前腕、つまり左腕の肘から先の部分、切断されて2・3日ってところ・・・年齢は二十歳前後、病変も奇形も無い、ごく普通の腕だったわ。」

「切断面に特徴は？」

「綺麗なものよ、肘と手首の丁度真ん中辺りを、大型の刃物でザクザク切って、骨は目の細かな金切鋸みたいなものでゴリゴリやったみたい・・・。」

「それって、普通なんですか？」

笑子がメモを取りながら尋ねます。

ボールペンを持ったその手首を掴んで、ぐいっと引き寄せると、「あんた、この腕を普

通に切ってみろって云われたらどうする？——一切断面が異常なら見りゃ分かるわよ、指紋も採取したしDNAも解析して記録してあるわ、残りの部位が出てきたら、死因も身元も解るんじゃないの・・・。」

「何だか、酷く機嫌悪かったわね穴見先生・・・。」

駐車場に急ぐ道すがら、玲子が呟きます。

「やっぱり、山科のマンション断ったの悪かったかな・・・。」

「きっと今頃、先輩は奴隷にされて、私は手足バラバラで疏水の流れに浮かんでますよ。」

「お～怖わ！」

「大沢の池からまた部分遺体が上がったようだ、この前の被害者かも知れん、早朝で悪いが直ぐ行ってみてくれ。」

刑事部長の永山から、その旨TELがあったのは、最初の事件から3日後の朝4時過ぎでした。

永山も、玲子と笑子のカップル同様、鹿児島県警から帰任したばかりです、自宅家財の整理も覚束ないまま、早々大きな事件に遭遇してしまいました。

大沢池は北嵯峨に在ります。

池の畔に人だかりができて、若い警備担当の警官が、規制線を巡らせつつありました。

玲子が警察記章を提示すると、挙手敬礼して、「間もなく、鑑識班が到着されます！」

「部分遺体は、体のどの部位？」

「腕であります！」

「―――右腕？」

「いえ、2体とも左の前腕部であります！」

「―――2体？」

水際に覆いかぶさる巨木の根元に、大きなブルーシートが敷かれ、その上に3本の円筒形の物体が・・・長さ30cm程の塩ビ排水管のような樹脂製で、蓋が開けられた2本から、蒼白いマネキンの腕のようなものが覗いています。

残り一本は、蓋が無くて空っぽのようです。

「この一本は？」

「最初から、空っぽでした。」

「貴方が発見したの？」

「そうです、先日の部分遺体発見から、ずっと警備しています。」

「どんな状態だったの？」

「蓋の空いた一本だけが、水面に浮かんでいました。他の2本と細い紐で繋がっていたものですから一緒に引き上げました、横にあるヘドロ口に塗れた黒いのがそれです。」

「一本だけ池の中で蓋が開いて、中の物が出てきたから、軽くなって浮かんできたんでしょうか？」

ブルーシートの横に屈んで観察する玲子の肩越しに、笑子が呟きます。

「―――そうね、それが3日前の部分遺体じゃない。」

「じゃ、厄介ですね・・・。」

「そう、どうして左腕だけなのか解らないけど、少なくとも3名の遺体損壊事件だわ。」

」



「笑ちゃん、あなたの遠い親戚だって男の人から、電話があったみたいよ・・・。」
府警本部の受付から、玲子がメモを持ってきました。

記入された番号に携帯からダイヤルして、暫らく話していましたが、「先輩、今日早引けしていいですか？夕方、京都駅のレストランで会いたって・・・。」

「いいわよ、知ってる人？」

「母方の遠い親戚で、東北大学の理学部で教えてるって沖縄の実家で訊いた記憶があります。1年前に京都に越してきたようで、夏に沖縄に帰った時、私が京都で刑事やるのを訊いたみたいで・・・。」

「凄いじゃない、物理学者かなにか？」

「生物学って訊いてます、会ったことが無いからどんな人か分かりません。」

「―――年齢は？」

「丁度、還暦くらいだと思います。」

「じゃ、亡くなったあなたのお父様と同じくらいよね、私も一緒に行ってあげようか？」

「大丈夫です、事件捜査中ですから・・・。」

笑子が早引けして暫らくたった頃です、刑事部長の永山が血相を変えて刑事部屋に飛び込んできました。

「どうしました部長！」

「一大事だ黒木！―――今朝の2体、3日前の1体、**DNA**型鑑定結果が3体とも一致した。被害者の女性は、左腕が3本あった！」

京大医学部実習棟、先日のカフェの同じ席で、穴見女医が首を傾げながら書類を見ています、玲子が近づくと、「あら玲ちゃん・・・今日は一人、相方さんは？」

「プライベートで早引けです・・・何見てるんですか？」

「**STR**タイピング報告書、3体の部分遺体のDNA鑑定結果よ。この反復パターン何処かで見覚えあるのよね・・・でも、思い出せない。」

「―――やっぱり、3体は同じ女性の左腕なんですか？」

「短絡に決めつけないで！3本も腕のある阿修羅みたいな女が、いる訳ないじゃない・・・。何れにせよ、今晚徹夜で3体解剖してみるわ。」

エントランスのガラスウォールの外側は、広大なキャンパスに黄色のイチョウが舞って、夕日を浴びた学生たちが寒々と帰って行きます。

古都の秋が益々深まります。

「ねえ、徹夜の前一緒にサウナに行かない？二人でゆっくり温まって、美味しいもの食べてしっぽりしようよ、鬼の居ぬ間に・・・。」

「―――遠慮します。」

京都府警本部大会議室、本部長以下全幹部臨席のもと、〔大沢池遺体遺棄・損壊事件〕の捜査会議が行われています。

玲子と、昨夜遅く帰宅した笑子も含めて、総勢50余名の刑事が出席していました。捜査1課長による事件経緯の説明に続き、永山刑事部長が立ち上がって、「今回の事案は、発見された部位のDNA型の素性からして、過去のバラバラ殺人事案とは状況が異なる。そこで、鑑識課の説明の前に、当該3体の前腕を司法解剖された京都大学医学部、穴見先生の医学的な説明を受ける。」

眼の下に薄っすらと隈をかけた女医が、大儀そうに立ち上がります。

「医学的というか、生物学的な報告になりますが・・・。」

と、前置きすると、「3体ともDNA型が同一であるという鑑定結果ですが、赤の他人であっても同一と鑑定される可能性は、低い確率で存在します。また、該当する個体が一卵性多胎児であれば、同一の鑑定が出ます。ただし、3人（一卵性多胎児）以上は事例が極めて少なくなります。」

「腕が一对以上発生する個体（過剰肢）も、事例として存在しますが、多胎児より更に希少で、多くの場合、過剰な器官には奇形が頻見されますので、今回の事案は該当しないと考えます。」

「一般に、四肢の部分遺体に関しては、死因が特定し辛い為、司法解剖しないのが通常ですが、今回の特異な事案に鑑み、昨夜3体とも実施してみました。」

「結論から云います！この3体は、人の器官ではありません、極めて精巧につくられた人工物です！」

場内が騒然となります、演壇背後の幹部席では、全員ポカンとした表情で周りを見廻しています。

「どういうことでしょうか、先生！」

最前列の若い刑事が、堪らず声を挙げます。

「組織工学という分野があります、またバイオメカトロニクスという言葉が近年注目されています。3体の筋肉組織の中に、微量のゼラチンハイドロゲルコロニーを発見しました。生体器官には存在しえないコロニーです。」

「ゼラチンハイドロゲルは、毛細血管がまだ発達していない組織に、酸素や栄養分を供給する物質です、バイオプリンターなどで積層配置した筋肉細胞の隙間に、適量付加していきます。」

「筋肉はそうでも、神経や血管はどう創るんですか？骨や骨髄はどうしようも無いでしょ？」

若い刑事が、反発します。

「生体吸収高分子ポリマーという樹脂を鋳型にして、細胞培養コロニーに埋め込みます。骨髄・神経・血管其々の細胞が取り巻いて鋳型通りの臓器になります。」

「―――そもそも、細胞はどう作るんだ！」

興奮した永山が大声を挙げます。

「恐らく、誰かの皮膚等生体組織から**IPS**細胞を生成し、様々な組織細胞に誘導分化させたんでしょう。従って、その個体のDNA情報が反映されている筈です。」

「3体とも、同じ個人の皮膚から創ったというんですか・・・。」

「解剖していくうちに、奇妙なことに気が付きました。通常の生体組織には必ず存在する偏りや、非対称、芯ずれ、ランダムな分布のような個体特有の個性が、3体を通して全くないのです。喩えが適当ではありませんが、丁度メイクし終わった女優の顔の様に、破綻が全くない・・・何やら人工の作為をそこに感じます。」

「人間の腕のような器官は、数学や物理学で表現しても、高次構造・複雑系の極みです。現時点、人の手でこれを創れるとすれば・・・組織工学の最先端を更に大きく凌駕した、俄かに信じられない大変な技術だと思いますわ。」



長い沈黙が大会議室を包みます。

大きく見開いて、廻りをキョロキョロ動き回る視線と、瞼を震わせながらジッと考え込む視線とが交錯します。

「―――だったら何か！そもそも今回の事案は事件性が無いというのか？」

府警本部長がいきなり立ち上がって大声を挙げます。

古参の幹部が低い声で呟きます。

「3体が人の腕じゃのうて、作り物やったら、精々が廃棄物処理法違反、程度でっしゃろなあ・・・。」

最初の部分遺体発見から一か月が経ちます。

京都府警のメディアへの開示は、社会のあらゆる分野で大反響を呼び起しました。

特に医学・生物学を始めとした日本の理学系研究機関の間では、当該人工器官（前腕部）の争奪戦が繰り広げられます。

結局、京大IPS細胞研究所（**CIRA**）が中心となって解析を進めた結果、穴見女医の判断の正しさが、裏付けられました。

社会の関心はバラバラ殺人事件から、誰がどの様にして当該人工器官を創造せしめたのか、学術的な興味に移ります。

多くの機関が組織工学・バイオメカトロニクスの先端技術を総動員して、再現を試みますが、評価されるべき成果は未だ上げられません。



京都府警本部では、刑事上の事件性が無いとの判断のもと、捜査本部も解体され、日常の穏やかさが戻ってきていました。

晩秋の乾いた風に落葉が舞う、嵯峨野落柿舎近くの竹林です。

休日の刑事カップルが渡月橋の袂で名物の湯豆腐を食べた帰り、落葉の小径を並んで歩いています。

「でも玲子さん、どうして左前腕部だけだったんでしょう？腕が出来るんなら脚や太腿だって創れそうなものだけど・・・。」

「其処しか創れない何か事情があったのよ・・・もう、事件じゃなくなったんだから、気味の悪い話は止しましょ。」

「それより、あなた何時ぞやの遠い親戚の男性とは、まだ付き合ってるんでしょ？」

「勤務明けに4回ほど会っています。東日本大震災の津波で、奥さんと娘さんをいっぺんに亡くされたみたいで、生きる気力をすっかり無くしていたのが、まるで娘が生き返ったようだって・・・私も、死んだ父と話しているようで。」

「その内、紹介してね・・・。」

「女同士のカップルだってことは、まだ云っていませんけど・・・。」

「必要なら私から話すから、大丈夫よ。――何て名前の方？」

「東恩納 将治です。」

「ひがしおんな？」

「沖縄によくある苗字です、本土では珍しいと思います。」

「沖縄の、あなたの実家にもあれっきりね……。電話や手紙でやり取りはあるけど、もう一度ちゃんと会って、お詫びしとかなないとね……。」

「お詫びだなんて……。」

「大切な娘のパートナーが、こんなおばちゃんだったから……お母さんとお兄さん、随分がっかりされたと思う……。」

「私の様に、両親も兄弟もいない天涯孤独ならいいんだけど……あなたの家族には、本当に申し訳ないと思うわ。」

「やめて下さい玲子さん……怒りますよ。」

「そうやってあなたが、私に丁寧な言葉を使うのも、お母さんに気を使っているからじゃないの？仕事の上の先輩だってことを、何処までも維持したいからじゃないの？」

「違います！私と玲子さんは、お互いに好きで一緒になったんです。私が玲子さんにため口をきかないのは、その方が話しやすいからです。仕事しているときは“玲子さん”とは呼ばないし、自宅に居る時は“先輩”って云わないし……そんなこと分かり切っているじゃないですか！」

何時になく凜とした反発に、玲子が一瞬たじろぎます。

「いいわ、解ったもう止めましょう……風が冷たくなってきたから少し急いで……。」

「玲子さん、やっぱり解っていない！私哀しい……。」

顔を左手で覆ったまま、小径を走り去ります。

鬱蒼とした竹林を左に折れて、そのまま見えなくなっていました。

先にマンションに帰りつき、我慢していた月のものを処理して、ベッドで横になって笑子を待っていると、そのままウトウト浅い眠りに落ちてしまいました。

眼が覚めて廊下に出てみると、閉めた筈のトイレのドアが開いています。

「——一笑ちゃん何処？」

「トイレのごみ捨ててくれてるの？ねえ、何処にいるの？」

その夜を最後に、笑子は帰ってこなくなりました。

笑子がいなくなって一週間が経過します。

本人の携帯は電源が切られたままで、思いつく心当たりを全て当たっても、一向に所在は判明しません。

府警本部の同僚刑事も、流石に玲子を気遣い、通常の業務に支障をきたす様になりました。

永山に事情を打ち明け、笑子の搜索願を提出して、期限を特定しない休暇を取ります。決意を固め、身支度を整えて、空路沖縄を目指します。

笑子の実家は、沖縄市泡瀬の海岸近くにありました。

RC2階建ての瀟洒な建物は、沖縄では一般的な住宅です。

2年前同様、シーサーが見下ろすヒンプンの塀の袂に、“白河”という表札が掛かっていました。

「そう云われても黒木さん、笑子はここには帰って来てないさあ。後で心あたいに連絡してみるがあよ。」

笑子の実兄が対応してくれました。

「お母さんに、お詫びを云いたいんですが・・・。」

「マーは、あんたには会いたくない云ってさあ、奥の部屋から出てこんさあよ。」

「“東恩納 将治”という方ご存知でしょうか？お母様のご親戚だと思うんですが・・・。」

「知らんなあ、マーに訊けば分かると思うが。その“将治”さんがどうかしたのかい？]

「遠い親戚だということで、京都でここ一か月ほど、親交を深めていたようなんですが・・・。」

その時、奥の引き戸が開いて笑子の母親が顔を出しました。

「東恩納のマサが、笑子になんかしたのかい・・・。」

「―――お母さま。」

一瞬、玲子の眼を射抜く様に見つめると、「あんたには、何も教えんさあ。」

引き戸を閉めると、そのまま出てきませんでした。

実兄が気の毒そうに、「マーもあんたを恨んどるわけじゃあらん、笑子も二十歳過ぎのじょうとうウフツチュ(大人)やあから、その内連絡してくるさあよ・・・悪いことは云わんから、今日はもう帰りなさい。」

ターコイズグリーンの海が、満面に沖縄の陽光を反射して、失意の玲子を慰めているようでした。



肩を落として帰り着いたマンションのエントランスに、穴見女医が心配そうに待っていました。

「どうしたのよ？二人揃って休暇取ってるって云うから・・・。」

部屋に上ってもらって、事情を説明すると、「それで、わざわざ沖縄まで行って来たの？」

「―――だったら、今すぐその笑ちゃんのお兄さんに、電話を掛けなさい。そしてこう訊くの“笑ちゃんには双子の姉妹がいませんでしたかって！”あなた達がいけない間に大変なことが分かったのよ。」

「ほら、いつか部分遺体のDNA型鑑定の反復パターンに見覚えがあるって云ってたでしょ、私のアーカイブストレージを片っ端から調べてみたの。そしたら、マイクロドローンのとき皮膚からサンプリングした笑ちゃんのDNA型と完全に一致したの！」驚いて振り返る玲子が、「―――どうということですか！」

「つまり、あの3体の人工器官は笑ちゃん本人か、笑ちゃんの一卵性多胎児の細胞由来だってこと・・・。」

困惑した空気がマンションの居間を包みます、玲子も流石にその意味を、俄かに理解することが出来ませんでした。

ソファーに腰を下ろし、気持ちを落ち着かせた玲子が、話題を変えて東恩納将治氏の話穴見にすると、「あなた、その東恩納って人物が、笑ちゃんの失踪に関与していると考えてるのね・・・。分かった、東北大学の友人に問い合わせしてみるわ、個人情報だから、少し時間がかかると思うけど。」

「今日は遅いから、沖縄のお兄さんには明日朝電話してみます。心配かけて本当に申し訳ありません・・・。」

「悪いと思うなら、一度サウナに付き合いなさい、体中揉み解してあげるから。」

「東北大学の友人から返事があったわ、“東恩納 将治” 専門は発生生物学、循環器科医師、医療分野の得意施術は穿刺術だって・・・。」

「せんしじゅつ？」

「細くて長い注射針のようなものを体に差し込んで、臓器の細胞や体液をサンプリングしたり、薬液を注入して治療したりする医療行為。施術する医師の技能がシビアに要求されるわ。」

医学部エントランスのカフェに、早朝から何時もの様に陣取った女子二人が、何時もの様にコーヒーを飲みながら報告し合います。

「東日本大震災の津波で、奥さんと一人娘を失った・・・。」

「それは、笑ちゃんから訊いています。」

「両親から、遺産を一人で相続してかなりの資産家らしいわよ、震災直後に大学を退職して、以降の消息が不明となってるわ。」

近くのグラウンドから、若々しい黄色い声が聞こえてきます。

「―――あなたの方は？」

「先生の云われる通り、笑ちゃんには一緒に産まれた双子の姉妹がいました。―――当時笑ちゃんの家族は、旦那様が病気がちで経済的に苦しくて、産まれてそのまま、片方が養女に出されています。」

「養女を貰った先が誰だと思います？」

「―――東恩納 将治？」

「結婚して、何年も子供が出来なくて、貰った赤ちゃんを夫婦で溺愛していたそうです。沖縄のお母さんが眼を泣き腫らして、話してくれたと・・・電話口のお兄さんも涙声でした・・・辛かったと思います。」

「辛かったのは東恩納医師も同じね、本人の目の前で奥さんと娘さんが、津波に吞まれたそうよ・・・。」

「―――本人の目の前で？誰か見ていたんでしょうか？」

「本人が、泣き喚いてそう訴えたらしいのよ・・・どうかしたの？」

「もし、流される刹那、娘さんの左腕を掴んだとしたら・・・そしてそこに鉄の板のような鋭い瓦礫が襲ってきたら・・・。」

「左前腕部だけが残されるわね・・・。」

鎮まりかえった緊張がカフェの空気に漲って、次の瞬間グラウンドから大歓声が沸き起こりました。

「―――そうか！皮膚組織由来のIPS細胞に拘っていたけど、切断器官から穿刺術で成体幹細胞をサンプリングする方法があるわ、その方が確実で、ずっと手っ取り早いかも

知らない――。」

立ち上がって大声で捲し立てると、「玲ちゃん、あなたは本部に帰ってスタッフを集めて・・・私は、研究室で必要となる設備のリストを作る。」

云い終らないまま走り出していました。



1時間後の府警本部刑事部捜査一課、いわゆる刑事部屋です。

「これが、穿刺サンプリング法で人工器官を創るために必要となる医療設備、装置と機材・器具の一覧。それを扱っている業者のリスト・・・みんな、どうしちゃったの？聞き込みに行きなさいよ早く！」

玲子が宥めるように、「穴見先生、皆他の事件で忙しいですし、笑ちゃんの件は未だ事件にもなっていませんから・・・。」

つつかつと玲子の前に近寄ると、「あんたそれでも刑事！掛け替えのないパートナーがどうなってもいいの！穿刺術ってのは、あんたたちが考えてるよりずっと危険な施術なの、笑ちゃんの死体が出てきてから動き出すんじゃ何もならないじゃない！しっかりしなさい！」

意を察した永山が、二人の方に向き直って、「責任は、俺がとる・・・黒木、ここに居るスタッフ全員の指揮を執れ！」

全員に穴見女医のリストのコピーが渡され、勇んで刑事部屋を出て行きます。

「大きな病院は必要ないからね！調べるのはあくまで小さな個人クリニック！今年に入って、リストにある医療設備を納入した京都じゅうのクリニックを調べ上げてきて！」穴見と玲子が大声を挙げて送り出します。

既に太陽は東の空に高く上り、冷え切った初冬の大気を、清々しく温め始めていました。

クリニックの捜査開始から、丸一日が経過しても有望な情報は挙がってきませんでした、刑事部屋には女子二人と、部長の永山が殆ど徹夜で陣取っています。

「個人クリニックに山を張ったのが、間違いだったかな。リストにあるような高額な装置は、個人病院じゃ無理だろう・・・。」

「不特定多数が出入りする大病院じゃもっと無理ですわ、複数の検査装置と、大型の手術室を、何時間も一人で占領することになるんですよ。」

「待ってください、個人クリニックにそんな大きな手術室ってあるんですか？」

「穿刺術ってね、複数の装置で常時モニター監視しながら位置を確認して施術するの、**OR**が小さかったらとても出来ないわ。」

「もし、個人の住宅にそんな手術室があったとしたら・・・。」

玲子が云い終らないうちに、永山の携帯にコールが入りました。

開業クリニックではないが、東山の中腹にある個人邸宅に、高額な検査装置を連続して納入した記録があるということです。

「穴見先生、黒木と一緒にその邸宅に飛んでくれませんか、私は本部長を説得して、裁判所に令状（捜索・差押許可状）の発付を頼んでみる！」

結局、令状を行使する必要はありませんでした。

玲子と穴見女医が邸宅に到着し、複数の警察車両が門前に集まったその瞬間、邸内の建物から一発の銃声が聞こえてきました。

緊急の現場判断で邸内に進入すると、2階の寝室に白衣を纏った男性の遺体が発見され、後に東恩納 将治氏本人であることが確認されました。

猟銃の銃口を口に銜え、トリガーを足の親指で引いたらしく、頭蓋の半分が吹き飛んでいました。

「笑ちゃん！笑ちゃん！」

半狂乱に叫ぶ玲子を落ち着かせながら、女医は建物の奥に進みます。

「地下に手術室があります！」

スタッフの叫び声が足元から上がってきます。

MRI・PET・SPECT等々大型の断層撮影装置が並ぶ地下の検査室の奥に、気道確保のマスクを着けた全裸の笑子が、手術台の上に横たわっていました。

周囲には様々な装置が、モニターに数値を表示しながら取り囲んでいます。

悲鳴を上げて取り付こうとする玲子を女医が押し留め、「―――ちょっと待って！彼女が今どんな状態か確認するからね。」

宥めるように諭しながら、男性スタッフとともに室外に閉め出します。

10分程して、安心しきった表情で出てきました。

「人工呼吸、バイタル維持、麻酔管理とも問題ないわ、設備も充分だから暫らくこの状態を維持します。麻酔がある程度醒めるまで動かさない方がいいけど、念のため高規格救急車を準備しておいて。」

玲子の方に振り返ると、「良かったわね、もう大丈夫。―――あなたの相方さん、まるで鬼の生命力ね！」

崩れるように縋り付く玲子の体を支えて、「あなた、大分痩せたんじゃないの？」



人工心肺に接続され、機能を維持された女性の左前腕が1体、手術室の奥の小部屋で発見されました。

本物の生体器官であることが確認され、津波で流された東恩納医師の娘のものと推定されます。

それにもまして、人々の心胆を寒からしめたのは、冷凍保存された無数の人工器官（左腕）でした。

手術室前室の壁に設置された巨大な冷凍庫の中に、溢れんばかりに保管されたそれらは、多くの場合奇形や病変を伴っていましたが、幾つかはほぼ完全な人間の前腕としての、機能を有していました。

笑子の体には、全身に約130か所の穿刺の痕跡が認められ、既に故人である東恩納医師の犯罪が、実証されました。

発見から6時間後に、笑子は左京区の京大病院に向けて搬送されました。

既に夜の帳が降りた京の町に、事件を訊きつけたパパラッチが併走する、賑やかな救急搬送となりました。

「まだ、退院できないんですかあ？穴見先生・・・退屈でえ退屈でえ。」

「あんたねえ、2週間近く麻酔で眠らされて、人工呼吸器で生命維持してたのよ、予後をちゃんと管理しなくちゃ駄目でしょ。体じゅう130箇所も串刺しにされて、平気で生きてるのはあんたぐらいなもんよ、少しは辛抱なさい！」



一週間後の京大病院の病室です。

付き切りで看病する玲子と、巡回診察の穴見女医がベッドの笑子をにこやかに見下ろします、引き戸を開けて刑事部長の永山が入ってきました。

「どうだ白河、顔色がいいがもう退院か？」うんざりした顔で穴見が振り返ります。

「東恩納さんの罪はどうなるのですか？」

「被疑者死亡で書類を地検に送付した、検察で不起訴処理される筈だ。それより、発見された人工器官の扱いが大変だ、有力大学の医学部間で争奪戦になってる。」

「娘さんの、本物の前腕は？」

「親族が引き取った、津波で遺体がまだ見つかっていないから、丁重に埋葬されるそうだ。」

「でも、私に双子の姉妹がいたなんて・・・親からも訊いたことないんですよ。それで結局、東恩納さんは私に何をしようとしたのかしら？」

「――娘さんの体を再現したかったのよ。」

ベッドの袂のスツールに腰を下ろしながら、穴見が話し始めます。

「だから、あなたの体を穿刺サンプリングや様々な断層撮影装置を使って徹底的に調べあげた・・・唯一同じ遺伝子を持つてるのは、一卵性双生児のあなたしかいないからね。」

「血管や神経の鋳型の製造を始めていたみたい、サンプリングした成体幹細胞の培養もね、穿刺でサンプリング出来ない部位は、IPS細胞を使うつもりだったのね、きっと。」

「娘さんの腕を、あれだけ大量に創ったのは？」

「多分、ある種のトレーニング。あれだけ創り続けて、何とか安定して信頼できるものが出来るようになった、きっと自信を持てたんじゃないの？」

「大沢池に3体遺棄したのは、冷凍庫に保管しきれなくなったからですか？」

「――それについては、こう思うのよね。」

穴見と反対側の椅子で、柿の皮を剥く玲子が呟きます。

「出来上がった人工器官を、他人に評価してもらいたかった。人工物と見抜けるかどうかってね。だから、1体目の円筒ケースには最初から蓋をしてなかったんじゃないかしら、湖水に流されて直ぐに見つかるように……。」

「研究者の性よね、私もまんまとそれに嵌められた、ごく普通の女性の前腕だなんて云っちゃたわ……。」

「それで最終的に、娘さんの体が再現できるんですか？」

「無理だと思う。――というのが、あなたの脳には一本も穿刺していないのよ。一番危険な部位だってこともあるけど、脳は最初から再現するつもりが無かったんじゃないかしら。」

「再現しても、それは娘さんじゃなくて、白河だものなあ……親とすりゃ大きなジレンマだろ、自殺した原因もその辺に在るのかなあ。」

しみじみと永山が呟きます。

「それと東恩納医師は、だいぶ以前から白河の消息を調べていたみたいだ。大分の潜水艇の事件・福岡のマイクロドローン・この前の自衛隊員とネグロイドの事件・北海道の常紋トンネルの事件、それぞれの新聞スクラップが自殺した部屋の机の引き出しから見つかった。」

「先輩には嘘ついちゃったけど、私たちが女同士のカップルだってこと、東恩納さん最初から知ってました……。」

「それについて訊きたいんだけど、嵯峨野の竹林から帰ってきたとき、私が寝てる間にあなたトイレ使ったでしょ……あれは？」

「先輩の月のもののごみ、ビニールに包んで持ち出したんです、御免なさい……。」

「――何で？」

「東恩納さんに相談したんです、私たちの子供が欲しいって……そしたら、何とかなるかも知れない、確約は出来ないけどやってみる価値はあるって、先輩の皮膚とか粘膜とか、血液でもいいから氷で冷やして持って来なさいって。」

「保冷バックに詰めて、東山のあの家に届けたら、出されたコーヒーを飲むと急に眠くなって……その後の記憶が。」

「ええっ！だったらあの精子、玲ちゃんの精子！」

穴見女医が大声を挙げて、スツールから立上がります。

「――私の精子？」

「冷凍保存された幹細胞の中に、ちょっと変わったのがあったのよ、培養液で蘇生させて観察したら、精子だった。元気に泳ぎ回ってたわ。女性だけが係った医療事件なのに妙だなんて思った。」

「きっと、玲ちゃんの子宮粘膜と血液から、IPS細胞を発芽させて、精原細胞に誘導分化させたのね、すごい技術だわ。東恩納医師は笑ちゃんの体を使う代わりに、笑ちゃんとの約束も守ったわけね。」

「――じゃ！その精子と私の卵子を受精させて、私の子宮に戻せば！」

「出来ません！」

「どうして！」

「医療の倫理規定に抵触するわ、特に生命倫理のガイドラインにね！」

「――そんなぁ！」

その時、病室の引き戸が開いて、奥寺が大きなトランクと果物かごを押しながら入ってきました。

「なあに！奥寺君どうしたの！」

「何だ、道警のSRIはどうした？首になったのか？」

「そうです、ちょっとやらかしちゃいまして・・・へへへっ。」

「――じゃ、また京都で最初っから？」

「そうです、また下っ端からです・・・宜しくお願いします。」

満面に嬉々として、奥寺は嬉しそうでした。

「でも、笑さん今度は災難だったね、黒木さんが助けてくれたの？」

「そうよ、私のことを心配して、3kgも体重落としたのよ・・・。」

病室を出て行きかけた女医が、急に振り返って、「――あんたは、随分太ったわね！」

眉間に青筋を浮かべながら、「麻醉でじっと動かないで、点滴で栄養ばかり摂ってたから、豚みたいに太ったって云いたいんだわ――あ～もう、悔しい！」



永山が奥寺と連れ立って帰ると、カップルだけが残されます。

窓の外は、夕日に照らされた比叡の山並みが、寒々と鮮烈に輝いています。

「元気になったら、あの女医縛り上げて、玲子さんの精子奪い返して来ますから・・・。」

玲子が窘めるように、「でもね笑ちゃん、今度ばかりは穴見先生いなかったらあなた助けられなかったわよ、親身になって動いてくれたのよあの人。感謝しないとね・・・。」

「分かっています・・・感謝しています。」

ウツリとした目で見上げる笑子に向かって、「私は、あなたみたいに病人の敏感なところを、刺激したりしないわよ。」

「玲子さん、冷たい・・・。」

ベッドに架けられた患者用のテーブル上の、今朝の新聞を手にとると、一枚の白い封筒が落ちてきました。

「―――何これ？」

「朝玲子さんがいない時に、看護婦さんが新聞と一緒に持ってきてくれたんですよ。黒木玲子様、親展になってるから・・・。」

京大病院気付、白河笑子病室、黒木玲子様とあります。

差出人の記載はありません。

封を切ると白い綺麗な便箋が2枚・・・。

“先日は、笑子の為に遥々沖縄まで来て頂いて有り難う。

会いたくないといって顔も出さずに御免なさい。

決して、あなたを恨んでいる訳じゃないのです。

2年前、あなたたちの話を訊いた時、私としては絶望で身も心も張り裂ける思いでした。

子供は出来ないだろうから、孫は諦めなければいけない。

沖縄の小さな街のこと、世間体もあります。

女性として生理的な嫌悪感もありました。

何としても、別れさせないといけなかったことも事実です。

しかし私はそうはせずに、この2年間、あなた達について繰り返し考えてきました。

あなたも知っているように、私は早くに夫を亡くし、そのようなことを考える余裕はありませんでした。この機にもう一度、夫婦、配偶者、家族といったものを、最初から考え直してみようと思ったのです。

そんな折、あなたが再び訪ねてきました。

あの時のあなたは、半分命が消えかかった顔をしていました。消えかかった命を何とか取り戻そうと、もがき苦しんでいるように見えました。

藁にもすがる思いで、沖縄に来たのではないかと思います。

申し訳ないことをしてしまいました。

あなたのその顔を見て、やっと気が付いたのです。

あなたは、やっぱり笑子の命の半分なんだ・・・。

命を懸けて笑子の命を思い遣っているんだ・・・。

沖縄にこのような諺があります。

みーとうや、ぬちぬ、かさにんじゅん。

夫婦は、命の重ね合い・・・という意味です。

不束な娘ではありますが、どうか笑子を宜しくお願いいたします。

――義母より。”

瞼の裏に、はち切れんばかりに溜めていた涙が、一斉に堰を切って頬を伝い流れ落ちてきました。

――終わり。

以上、全てフィクションです。実在する個人・団体とは一切関係がありません。悪しからずご了承ください。

尚、添付した写真は、PhotoACから転載させて頂きました。

女同士で築く家族は

<http://p.booklog.jp/book/117540>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117540>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト